

氏名	馬 小菲	
授与した学位	博士	
専攻分野の名称	文学	
学位授与番号	博甲第 5998 号	
学位授与の日付	平成 31 年 3 月 25 日	
学位授与の要件	社会文化科学研究科 社会文化学専攻 (学位規則 4 条第 1 項該当)	
学位論文題目	カテゴリーの複合性の観点から見た日本語の時間副詞 —「今」という時間をめぐって—	
学位論文審査委員	教授 宮崎 和人 准教授 片桐 真澄	教授 栗林 裕 准教授 堤 良一

## 学位論文内容の要旨

### 1. 目的

本論文では、時間名詞「いま」が格（はだか格を含む）やとりたて形式をとったり、語基として合成語を形成したりして時間副詞として働く場合や、文法化によって従属接続詞化した用法を取り上げ、述語論において有効性が確認されているカテゴリーの複合性（テンポラリティー・アスペクチュアリティー・モダリティー・評価性・タクシス性・因果性）という観点から、それらについて考察を行うことを目的とする。

### 2. 序論

時間の言語表現としてのテンポラリティーについては、文法的＝形態論的な表現手段としてのテンスと語彙的な表現手段としての時間副詞がある。また、表現内容の観点からは、絶対的テンポラリティー（発話行為時基準）と相対的テンポラリティー（他の出来事時基準）に分かれ、時間副詞についても、この観点からの二分類が可能である。「いま」は前者にあたり、発話時と同時であることを表す。しかし、このような定義が十分でないことは、「いま」が発話時現在というより相当に広い幅の現在を表したり、直前・直後を表したりすることが少なくないことから明らかである。さらに、「いま」には、「いまは」「いまも」「いまでは」「いまでも」「いまや」「いまだに」など、様々なとりたて形式が存在するが、それらは名詞のとりたて形式とは違って、語彙化が進んでいる。このほか、「いまごろ」「いまさら」などの合成語を形成したり、従属接続詞へと文法化したりしたも

のもあり、これらも、「いま」がただ現在というテンポラリティーのみにかかわるのではないことを示唆している。このように多数存在する「いま」の関連語彙の意味と機能を体系的に把握する必要がある。

### 3. 本論

第1章では、はだか格の「いま」を取り上げ、会話文と地の文に分けて、述語のテンス・アスペクトとの関係も視野に入れながら、テンポラリティーの側面を中心に考察する。ここでは、先行研究では存在しないとされているシテイタ形式と共起した例について報告している。

第2章では、「いま」のとりたて形式として、「いまは」「いまでは」「いまも」「いまでも」「いまや」「いまだに」を取り上げ、とりたて性と評価性の両面から考察する。考察の結果、「いまは」は、現在に焦点をあて現在以外の時間からとりたてる（対比される状況は明示されないこともある）のに対して、「いまでは」は、先行文に明示される過去の状況からの推移の結果として現在の状況をととりたて、肯定的な評価を与えること、「いまや」のとりたて方は「いまは」と似ているが、評価性（結果に対する肯定的評価）に関しては「いまでは」と共通であること、「いまも」と「いまでも」は、いずれも現在という時間を過去と同じ状況にある時間として累加するとき用いられるが（対比される過去の状況は基本的に先行文に明示される）、後者には特に、現在の状況が過去から変わっていないという認識に加えて長い時間の経過の中で状況に変化があってもよいはずであるのに変化していないという一種の評価的感情を伴うこと、「いまだに」については、基本的に否定的な評価的感情を伴うという点が「いまでも」とは違うこと、よって、推移の結果に対する肯定的な評価を含む「いまや」と状況に変化のないことに対する否定的な評価を含む「いまだに」は対照的であること、などを明らかにした。

第3章では、「いま」のに格形式の「いまに」「いまにも」を取り上げ、主にモーダルな側面との複合を観察する。まず、「いまに」が一人称をとるときには、モーダルな意味は〈話し手の決意〉になる。「いまに」が叙述系の推量の文と共起する場合、実現を強く信じるという意味での〈確信〉になると同時に、期待や恐れのような評価的なニュアンスが加わる。「いまにも」は、「しそうだ」と共起して〈将前性〉あるいは〈徴候〉を表すことが多いが、スル形式と共起する場合には〈予測〉を表す。

第4章では、「いまごろ」に関する工藤真由美氏の記述を踏まえて、「いまごろ」と「いまさら」を比較した。「いまごろ」は、モーダルな側面について〈事実未確認〉〈事実確認〉〈反実仮想〉の三つの場合があり、〈事実確認〉の場合に評価感情が前面化することが知られている（このとき、「は」でとりたてられないことを指摘した）。また、評価感情には〈意外性〉と〈不当性〉がある。一方、「いまさら」は常に〈不当性〉を表す。「いまさら」の例には、未実現の場合と実現済みの場合があり、実現済みの場合、「いまごろ」と「いまさら」は置き換えられることが多いが、「いまごろ」は、その時期の実行が不適切であれば使用できるが、「いまさら」は、経緯を踏まえて手遅れであるというときにしか使用できない。

第5章では、新聞記事のテキストにしばしば見られる、従属接続詞化した「いま」を取り上げる。

「いま」によってむすばれる従属複文には、同時関係性を表す時間従属複文の側面と因果関係を表す従属複文の側面がある。前者の側面は、「とき」によってむすばれる時間従属複文が比較の対象になる。両者の間には、基本的に同時関係（重複的同時性・接触的同時性・全体的同時性・部分的同時性）を表し、従属節の述語がシテイル形式のときは重複的同時性・全体的同時性を、従属節の述語がシタ形式のときは接触的同時性を表す、といった共通点が見られる。一方で、「とき」でむすばれる従属複文が現在のことを表すのはまれであるが、「いま」でむすばれる従属複文は現在のことしか表せない（ただし、その幅は広い）。「とき」でむすばれる従属複文における従属節のスル・シタは限界達成前・後というアスペクト的な対立を構成するが、「いま」でむすばれる従属複文では従属節のシタは限界達成後を、スルは主に継続過程を表す、といった相違点がある。他方、「いま」によってむすばれる従属複文が因果関係を表す用例は9割以上に及び、因果関係性はこのタイプの複文の特徴として定着しているといえる。因果関係の内実は、主節のモーダルな意味によって、原因・結果、根拠・判断、理由づけに分かれる。新聞記事での実際の使用においては、典型的な同時性や客観的な原因・結果関係を表すものは少なく、現状を問題視し、それに対する対応を望み、求めるという書き手の積極的な態度（未来への志向性）が言い表されているものが非常に多い。

#### 4. 結論

テンポラリティー・アスペクチュアリティー・モダリティー・評価性・タクシス性・因果性などのカテゴリーは、相互に作用しながら、文の対象的な内容と現実との関係としての〈陳述性〉を体系化している。そうした意味で、カテゴリーの複合性は必然的であり、言語研究の様々な局面において重要になる考え方である。

### 学位論文審査結果の要旨

学位審査会は、2月5日（火）16時30分よりセミナー室2-1で開催した。審査委員は、指導教員の宮崎（日本語学）、副指導教員の栗林教授（言語学）および片桐教授（言語学）と堤准教授（日本語学）が担当した。

テンポラリティーの表現手段の中核は述語の形態論的テンスであるが、語彙的な表現手段としては時間副詞がある。時間副詞には、ダイクティックなものと非ダイクティックなものがあり、前者の代表は「いま」である。「いま」の用法は大変広く、〈発話時現在〉だけでなく、〈現代〉の意味で使用されたり、〈直前〉〈直後〉を指したりすることがあることはよく知られている。「いま」はまた、「いまは」「いまでは」「いまも」「いまでも」「いまや」「いまだに」など、多様なとりたて形式をもち、「いまに」「いまにも」のように、に格をとると、〈未来〉を表すようにもなる。さらには、「いまごろ」「いまさら」などの様々な合成語の材料にもなる。このように広がる「いま」の関連表現の意味と機能を「カテゴリーの複合性」という考え方にもとづいて体系的に記述することが審査論文の目的である。

審査論文では、その序論において、研究の方法に関して、次の二つのことを標榜している。一つ

は、小説や新聞記事から収集した多数の実例を使用し、実際の言語使用の中で言語事実を観察・記述するということであり、もう一つは、「いま」の諸形式や合成語を形態素（助詞や接辞）に分割せず、全体を一つの副詞として観察・記述するということである。

以下、各章の考察内容を簡単に紹介しておく。第1章では、基本となるはだか格の「いま」について、それが述語のアスペクト・テンス体系と関連しながらどのような時間的な意味を表すかについて、会話文の場合と地の文の場合を区別して考察している。第2章では、「いま」のとりたて形式を取り上げ、とりたて方と評価性の両面から、対比系の「いまは」「いまでは」「いまや」と累加系の「いまでも」「いまだに」の特徴をテキストを視野に入れて体系的に記述する。第3章では、に格形式の「いまに」「いまにも」を取り上げ、テンポラリティーやモダリティーとの関係を見る。第4章では、合成語の「いまごろ」「いまさら」を取り上げ、モダリティーおよび評価性との関係を見る。第5章では、「TPPが事実上崩壊した今、東アジア地域包括的経済連携（RCEP）締結に向け、日本がリーダーシップをとるべきだ」のような、新聞記事で多用される、接続詞的な「いま」によってむすばれる従属複文におけるタクシス（同時性）と因果性の複合を捉える。

これらの章の考察において審査論文が発見したことは数多いが、中でも、ほとんどの語彙に評価性が関係しているという事実を明らかにしていることは注目に値する。「いまは」と「いまでは」は、とりたて方（対比性や推移性）において相違するだけでなく、後者には、推移の結果に対する肯定的な評価が含まれる。「いまでも」と「いまだに」では、後者の方に、長い時間の経過の中でも状況に変化がないということに対する評価的感情が伴う。「いまや」は、とりたて方においては「いまは」に類似するが、「いまでは」と同様に、推移の結果に対する肯定的な評価を含み、状況に変化のないことに対する否定的な評価を含む「いまだに」と対照的である。また、「いまに」と「いまにも」の比較においても、前者には期待や恐れといった評価的感情がきわだつ。さらに、「いまごろ」と「いまさら」では、前者は〈事実確認〉の場合にのみ評価性を伴い、〈意外性〉も〈不当性〉もあるのに対して、「いまさら」は実現済みでも未実現でも常に評価性を伴い、評価性の意味は手遅れという意味での〈不当性〉に特化している。従属複文を構成する「いま」についても、同時性と因果性の複合にとどまらず、現状を改善を要するものと評価したうえで、対応の必要性を訴えるという、評価的な構造の定着が見られる。いずれの主張も、実際の使用例の観察にもとづいており、説得的である。

終章では、こうしたカテゴリーの複合性は偶然のことではなく、これらのカテゴリーはもともと文の対象的な内容と現実との関係としての〈陳述性〉として一体のものであり、それらの複合は必然的であると説明し、論文を締め括っている。

審査会では、記述的研究としての審査論文の価値を評価する声が多かった。テクストレベルでの用例の観察が行き届いており、「いま」とシテイタ形式の共起が可能であることや、「いまごろ」が評価性をもつときには「は」でとりたてられないことなど、先行研究が気づいていない事実の指摘にも感心させられた。体系的な記述を心がけたことが類義語の使い分けの明示的な説明につながっているとの指摘もあった。特に優れた部分として、第5章の従属複文に関する記述を評価する声もあった。これは、博士後期課程に進学して最初に行った研究であり、このテーマで日本語学会全国

大会の研究発表を行った際には、席上、複数の研究者から好意的なコメントをいただいた。

一方、問題点としては、多くの語彙を取り上げているとはいえ、まだ網羅的といえるものではないということや、時間副詞に関する総論が必要ではないかということ、原型的な意味からモーダルな意味などの派生的意味が出てくるプロセスの説明が必要であるということが指摘された。また、アドバイスとしては、関係節化に関するアルタイ系の言語との共通性や中国語の「現在」、英語の“**now that**”など、他言語の状況も見るとよいのではないかという指摘があった。

審査論文には、いっそう深く論じることが必要な点もあるものの、先行研究が少ない状況において、地道に言語事実の発掘に務め、「カテゴリーの複合性」の探究という一貫した姿勢によって見通しのよい結論を得ており、この方面の研究の基礎をつくった意義は決して小さくない。審査会では、審査委員全員一致で、審査論文は学位授与にふさわしいという結論に達した。